

Printalk

特集 | THE 永久保存版

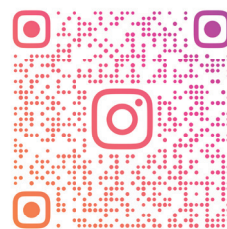
AI 活用×中小企業

連載 | マルワアカデミー

いきもの天白紀行
ツバメと共存する「フン皿」 開発ストーリー



ZINE
BASE
NAGOYA
Presented by Maruwa



ZINE_BASE_NAGOYA



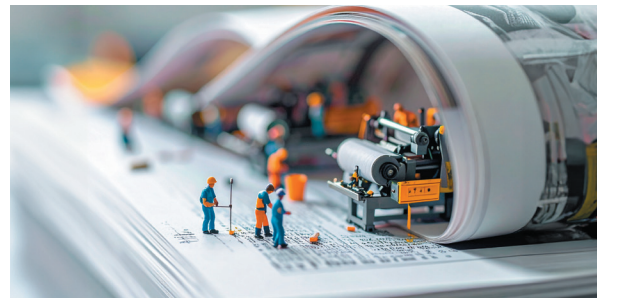
特集 AI活用×中小企業

最近、「AI」という言葉を耳にしない日はありません。便利そうだけれど、少し難しそう。自分の仕事にどう関係があるのだろう——そんな声も聞こえてきます。弊社では昨年より、全社員でAIを学び、使い、試してみる取り組みを始めました。特別な人だけのものではなく、誰もが使える道具としてのAI。その現在地をご紹介します。



ツール ▶ Adobe Express

紙の上に広がる印刷インクが、森や海、動物へと変化していく。印刷機が生命ある生態系を生み出している世界。鮮やかな色彩、シュールで幻想的、超高精細、自然と産業の融合。



ツール ▶ Adobe Express

印刷された雑誌ページのクローズアップ。紙の中に、小さな作業員たちがミニチュアの印刷機を動かしている世界が広がっている。ミクロの世界観、チルトシフト風の写真表現。



ツール ▶ Adobe Firefly

紙が積み重なり折り重なって巨大な都市になる。建物は印刷の質感ででき、道路はインクの線で構成され、人々が歩いている。高精細で想像力豊かなアイソメトリック表現。



ツール ▶ Adobe Firefly

神様が電話対応しているシーン。雲に囲まれたやわらかく明るい空間の中、デスクに座り受話器を耳に当てて落ち着いて話している。白髪でやさしい笑顔、知的で穏やかな表情。

1 「どこにあえずきつてみる」から始まった一年

弊社がAI学習を始めたのは昨年五月のことです。外部サービスと契約し、全社員を対象にeラーニング形式での学習をスタートしました。期間は一年。パソコン一台あれば、好きな時間に受講できる仕組みです。

「好きな時に好きなだけ学べます」と聞くと、なんだか理想的に思えます。けれど実際は、「今日は忙しいから明日にしよう」「今週はちょっと余裕がなくて」と、つい後回しになってしまつたものです。これはきっと、多くの会社で起こっている、あるある、ではないでしょうか。

そこで弊社では、このAI学習を任意ではなく、正式な業務の一環として位置づけました。勤務時間内での受講も可能とし、「時間があればやる」ではなく、「仕事として取り組む」体制を整えました。少し強制力がありますが、それは「みんなが同じスタートラインに立つ」という思いからです。

学習対象は、文章生成AI、画像生成AI、動画生成AI、資料作成支援AIなどさまざまです。最初は戸惑いながら操作していた社員も、回を重ねることに少しずつ慣れていきました。「思ったより簡単だね」「こんなこともできるんだ」といった声が社内に増えていったのが印象的です。



2 なかなか進まない。それでも続ける理由

とはいえ、順風満帆というわけではありませんでした。学習の進み具合にはどうしても個人差が出ます。得意な人はどんどん進みますが、苦手意識のある人は画面を前に固まってしまうこともあります。

そこで立ち上げたのが「AI活用推進プロジェクト」です。各部署からメンバーを選出し、全社的に学習を後押しする体制をつくりました。

プロジェクトメンバーは、定期的に社内へ声をかけを行い、「最近こんな使い

方をしました」「こんな工夫がありました」と情報共有をしています。また、学習状況を確認し、全体の傾向を分析する取り組みも行っています。

この分析にも、もちろんAIを活用しています。データを整理し、傾向をまとめ、課題を見つける。AIを学びながら、AIを使う。まさに実践の連続です。

私たちが大切にしているのは、数字そのものよりも「使ってみた経験」です。完璧に理解してから使うのではなく、触れてみる、試してみる、失敗してみる。その積み重ねが、結果として大きな力になると考えています。

3 便利さの裏側にあるもの

AIはとても便利です。質問をすれば瞬時に答えが返ってきますし、文章の下書きもあつという間に作ってくれます。けれど、その便利さの裏側には注意すべき点もあります。

例えば、個人情報や取引先の機密情報を誤って入力してしまうリスク。あるいは、生成された文章や画像が、どこかの誰かの権利を侵害してしまう可能性があります。AIは賢いように見えて、責任を取ってくれるわけではありません。

そこで弊社では、「生成AIサービス利用ガイドライン」を策定しました。

IT-00-00 情報セキュリティ運用手順書 05 附録_生成AI利用ガイドライン
2023.11.10 初版 作成 : (学習開始に伴う改定 : 網掛け部分変更)
2023.05.20 第3版 作成 : (学習開始に伴う改定 : 網掛け部分変更)

生成AIサービス利用ガイドライン

情報セキュリティ管理者
はじめに

本ガイドラインは、当社の業務で外部事業者の提供する生成AIサービスを利用する際に注意すべき事項等をまとめたものです。

生成AI利用ガイドライン

安全で効果的な生成AI活用のために

～皆さんを守るためのルール～

生成AIは便利なツールですが、間違った使い方をすると法的リスクや情報漏えいのリスクがあります

- 社員ブログ、SNS 投稿その他広報関連文書類の下書きまたは一部作成 (イラスト・画像生成を含む)
- 顧客向け資料作成またはそのためのアイデア出し
 - 顧客等に提出予定のプレゼン資料、企画書、報告書等の下書きまたは一部作成 (顧客等が生成AI利用を禁止していない場合に限り)
- コンペ・応募作品またはそのためのアイデア出し
 - コンペ等への応募作品の下書きまたは一部作成 (AI生成物での応募が禁止されていないコンペへの利用、かつAIの利用規約でコンペ作品等への利用が禁止されていない場合に限り)

どのような目的で利用できるのか、何を入力してはいけないのか、生成物をどのように扱うべきかを明文化しています。

さらに、ガイドラインを配布するだけでなく、勉強会も実施しました。なぜこのルールが必要なのか、どんなリスクがあるのかを共有することで、単なる「決まりごと」ではなく、自分ごととして理解してもらうことを大切にしました。

AIを安全に使うということは、ブレーキを踏むことではありません。安心してアクセルを踏める状態をつくることだと考えています。

4 現場での小さな変化

学習が進むにつれ、少しずつ現場にも変化が見え始めました。
ある部署では、次期目標のアイデア出しにAIを活用しました。これまで何度も話し合ってきたテーマでも、AIに問いかけることで新しい視点が加わります。出てきた提案をそのまま採用するわけではなく、議論のきっかけとして十分すぎるほどです。

また、新商品の企画段階でAIを「壁打ち相手」として使った例もあります。自分たちの強みや技術を書き出し、それをもとにアイデアを広げていく。すると、自分たちだけでは思いつかなかった組み合わせが浮かび上がってきました。そこから生まれた商品が、形になりつつあります。
過去データの整理や分析、資料のたたき台作成、デザインの検討など、活用の幅は着実に広がっています。「まずは下

書きだけAIに任せろ」「考えをまとめる手伝いをしてもらおう」など、無理のない使い方が定着してきました。
最近では、「これ、AIに聞いてみたらどうかな？」という言葉が自然に出るようになってきます。特別なことではなく、選択肢の一つとしてAIが存在する。そんな空気が少しずつ根づいてきました。



生成AI一覧

カテゴリー	ツール名
文章生成AI	ChatGPT
	Claude
	Gemini
	Perplexity
画像生成AI	Canva (画像)
	ImageFX
	Midjourney
	Stable Diffusion
	Adobe Firefly
	Adobe Express
	Adobe Illustrator
動画生成AI	Adobe Photoshop
	Vrew
	Captions
	submagic
	Pika
	Canva (動画)
	NoLang
	DomoAI
	GoEnhanceAI
	資料生成支援AI
Gamma (資料)	
Copilot for Microsoft 365	
Canva (その他)	
WEB生成AI	10Web AI
	Wix
	JIMDO
	Gamma (Web)
	アバター生成AI
HeyGen	
その他	Notion AI
	Creative Drive
	Notebook LM
	Genspark
	tl;dv
	LINE WORKS AiNote

5 AIは魔法ではないけれど

AIは魔法の道具ではありません。ときには見当違いの答えを返しますし、自信満々に間違えることもあります。だからこそ、最終的に判断するのは人です。私たちは、AIに仕事を奪われるのではなく、AIを使って仕事の質を高めたいて考えています。時間を奪う単純作業を減らし、その分、考える時間や話し合う時間を増やす。そのための道具として活用していきたいのです。

ある環境の中でも、できることはたくさんあります。小さく始めて、試して、振り返って、また試す。その繰り返しで、未来をつくと信じています。
全社員で学び続けるこの取り組みは、まだ道半ばです。それでも、一人ひとりが「ちょっとやってみよう」と思える環境が整いつつあります。AIは目的ではなく、あくまで道具。けれど、その道具をどう使うかで、会社の景色はきっと変わります。
これからも私たちは、AIと肩肘張らずにつき合いつつ、一歩ずつ前に進んでいきます。

修正前



ツール ▶ ChatGPT

会議テーブル上および参加者の前に置かれているすべてのペットボトルを完全に削除してください。削除後は、テーブルの木目や床、周囲の椅子や人物との境界を自然に補完し、違和感が出ないようにしてください。照明による影や反射、遠近感も維持し、元からペットボトルが存在しなかったように自然に仕上げてください。

修正後



AIでゲームが作れちゃう？

先日、弊社のスタッフブログでも紹介されていましたが、AIとの会話の流れでゲームを作ってしまった社員がいました。なんでも、インターンシップや職場体験の学生に、印刷会社の仕事を楽しみながら理解してもらおう目的で作ったのだとか。採用イベントや工場見学に取り入れると面白いかもしれませんね！

クイズ
AIで作るゲームに興味を持ったあなた。下記のQRコードに対して適切な対応はどれでしょうか？

スタッフブログ



- A たたかう
- B にげる
- C QRコードを読み取る



マルワアカデミー

マルワは「**あいち生物多様性企業認証**」の認証企業です。近隣地域の生物・自然環境に関する記事を連載でお届けします。

いきもの天白紀行

Creature Tenpaku Journey

ツバメと共存する「フン皿」開発ストーリー



ツバメは古くから「縁起が良い鳥」として親しまれ、人の暮らしのそばで生きてきました。しかし近年、環境の変化により、その数は減少しています。こうした現状を受け、私たちはツバメと人が共に暮らせる環境づくりを目指し、「ツバメのフン皿制作キット」を開発しました。地域や家庭で手軽に設置できる工夫も取り入れていきます。


ツバメのフン皿とは

ツバメのフン皿は、巣の下に設置する受け皿です。フンが地面や壁に落ちるのを防ぐことで、汚れによるトラブルを軽減します。これにより、「汚いから巣を壊す」のではなく、ツバメを見守る環境づくりに繋がります。

製品の特長

本製品には、環境と使いやすさの両面に配慮した特長があります。余り紙や段ボールを活用したアップサイクル製品であることに加え、底面のデザインは4種類から選択可能です。イラスト付きの説明書を同梱しており、誰でも簡単に設置できます。また、売上の一部は日本野鳥の会へ寄付され、自然保護活動の支援に繋がります。

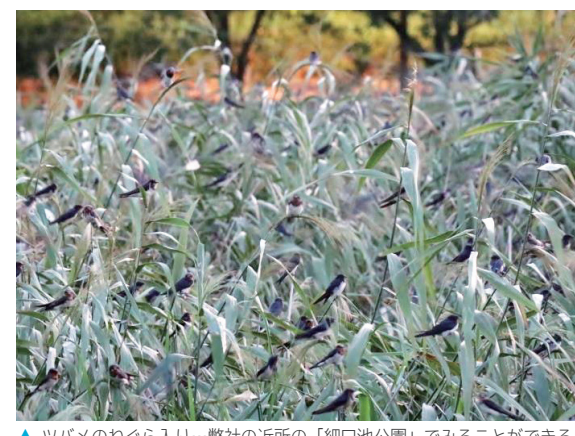
ツバメのフン皿の組み立て・使い方



- ①台紙に書かれた指示に従って折り目をつける
- ②イラストの通りに組み立てる
- ③接着剤やテープでとめる
- ④ダンボールを台紙にはる
- ⑤完成!

ツバメを取り巻く現状

ツバメは春になると南から渡ってくる渡り鳥で、人通りの多い場所に巣を作る習性があります。人の近くに巣を作ることで、外敵から身を守っているのです。一方で、近年はその数が減少しているといわれています。背景には、里山や農地の減少によるエサ不足、住宅構造の変化による営巣環境の減少、そしてフンによる汚れを理由とした巣の撤去などがあります。かつては身近な存在だったツバメも、今では守るべき存在へと変わりつつあります。



▲ ツバメのねぐら入り...弊社の近所の「細口池公園」でみることができる

開発のきっかけ

本取り組みは、愛知県が実施する「あいち生物多様性マッチング」をきっかけに始まりました。これは、生物多様性の保全に取り組み企業と自然保護団体をつなぐ仕組みです。弊社と日本野鳥の会愛知県支部はこの制度を通じて出会い、活動をスタートしました。日本野鳥の会愛知県支部からは「ツバメのフンが原因で巣が壊されてしまう現状を改善したい」という課題が提示されました。一方、弊社では印刷工程で発生する余り紙や使用済み段ボールの有効活用方法を模索していました。こうした双方の課題が結びつき、フン皿の開発へとつながりました。



人がつどい、社会に発信する
株式会社 **マルワ**
あいち生物多様性
マッチング
公益財団法人 **日本野鳥の会**
愛知県支部

販売と取り組みの広がり

本製品は弊社の通販サイトにて販売しています。昨年度は500枚を製作し、現在も1個1100円(税込・送料別)で販売しています。

マルワのオンラインショップにて販売中

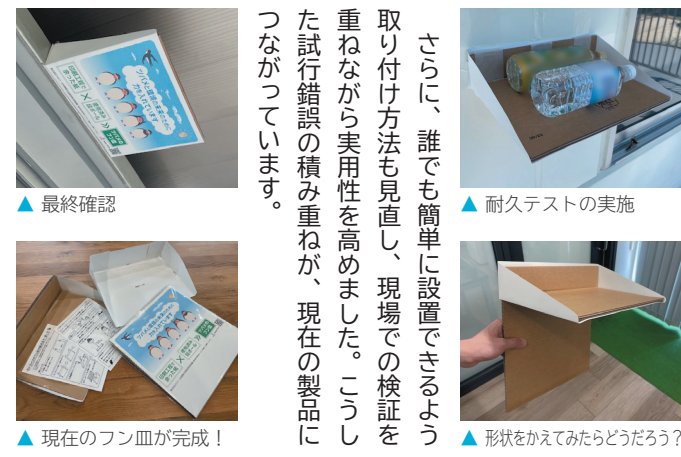


これからに向けて

ツバメが減少することは、私たちの身近な自然や風景が失われることでもあります。環境の変化をすぐに止めることは難しくても、ツバメの子育てを見守ることは私たち一人ひとりにできる行動です。フン皿の取り組みを通じて、人と自然が共に暮らせる環境づくりをこれからも進めていきます。

試行錯誤のプロセス

開発は決して順調ではありませんでした。紙製という特性上、耐久性や防水性の確保が大きな課題となることに加え、設置のしやすさや安全性、ツバメへの影響にも配慮する必要があります。素材の選定や形状の工夫を繰り返し、試作品の改良を重ねることで、少しずつ完成形に近づけていきました。



- ▲ 最終確認
- ▲ 耐久テストの実施
- ▲ 形状をかえてみたらどうだろう?
- ▲ 現在のフン皿が完成!

注目の『環境王』

2025/05/21
ツバメの子育て支援にご協力を!
今回取り上げた「ツバメのフン皿」について組み立て方など紹介しています!



2026年1月～3月の『環境王』

今年もみんなでピオラの花植えをします!
フラワーバレンタイン2026に行ってください!
捨ててしまっているアレでアップサイクルしてみたい!

『環境王』とは...
マルワYouTubeチャンネル内のシリーズの1つです。マルワの日常を『環境をテーマ』に切り抜いて皆さまにお届けするコーナーです!
動画のご視聴&チャンネル登録
よろしくお祈りします!



新入社員紹介

この度、企画営業部に配属となりました、関元紗弥香です。

大学時代は関西大学で心理学を専攻しており、人の心の動きやコミュニケーションのあり方について学んできました。

就職活動の中でこの会社に出会い、一番惹かれたのは「社員の皆さんが作り出す温かい雰囲気」でした。心理学でも「環境が人に与える影響」は非常に大きいと言われますが、この素晴らしい空気感の中で働けることを心から嬉しく思っています。



これからは、学んできた知識を活かし、皆さんがより気持ちよく仕事に打ち込めるよう、細やかな気配りができる存在を目指したいです。まずは目の前の業務を一つひとつ丁寧に覚え、皆さんに「関元がいてくれて良かった」と信頼していただける社員を目指して、精一杯頑張ります！

PICK UP



ZINE BASE NAGOYAは
創りたい想いをかたちにする、プラットフォーム。
ZINEって何？これから作りたい！そんなあなたと伴走します。



HP

HPにて問合せ等もお待ちしております！



Instagram

フォローして続報をお待ちください♪



What's been up? 2025.12 ~ こんなことがありました。

2025年 12月

エコプロにてサーキュラーコップンパーパーを使った弊社商品が展示されました①

2026年 1月

東海学園高等学校の学生2名がインターンシップに参加しました
弊社がプロデュースするZINEプロジェクト
「ZINE BASE NAGOYA」が始動

ZINEフェス名古屋に出展しました②



ZINE制作キット「ZINE作郎(つくろく)さん」Webで販売開始



原中学校の学生2名が職場体験に参加しました

名古屋芸術大学の学生1名がインターンシップに参加しました

3月

名古屋ウィメンズマラソン2026にボランティアとして参加しました③



ISO14001
ISO27001 認証取得